

あなたは負けない

神奈川県 醍醐千里

今年二月、三十歳になった教え子たちが学年同窓会を開いてくれました。その学校に赴任した私の年齢がちょうど三十歳。二人目の子の育児休暇が明けてすぐに異動となり、その異動先で出会った中学一年生。それがその学年の三百人の子どもたちでした。

少々荒れた中学校からの赴任でしたので、何日たっても生徒の暴言を聞くことのない穏やかな学校の様子に、私は新鮮な気持ちになりました。驚く私に先輩先生がこう言いました。「この学校には自浄作用があるんだよ。どんな暴れん坊でもこの学校に転入してくると、あっという間に前向きになってしまうんだ」。

先輩先生のその言葉どおり、生徒達はみんな生き生きと活動し、授業、行事、部活動と、校内はいつも明るく活発な雰囲気にあふれていました。

私は生徒会の担当となり、行事に関するたくさんのお話を学びました。当時保育園の子二人の子育てに追われ、一秒もゆとりがないような毎日でしたが、生徒と行事を作れることが嬉しくて、毎日夢中になって仕事をしていました。すべてにおいて楽しい日々でした…と言いたところですが、実は一人苦手な男子生徒がいました。苦手と言っても「嫌い」という意味ではありません。嫌いどころか、その子からにじみ出る強さに、憧れにも似た気持ちを抱いていたのだと思います。誰にも染まらない自分を確立していたその子は、周りがどうあれ、いつも揺れずにいました。

小さなことで大喜びしたり、がっかりしたり、揺れっぱなしのこんな私のことをきくとあの子は嫌いだろう…。

そう感じてしまうような出来事がたびたびありました。真っ向からぶつかることもありました。その子との時間、いつも私は緊張していました。結局、心の通い合いを実感できないままその子は卒業していきました。

卒業後の様子がなかなか伝わってこない教え子もたくさんいるのですが、不思議とその子の様子は、節目節目に私の耳に入ってきました。高校での活躍をテレビで見た日もありました。町で偶然出会うこともありました。相変わらず緊張してしまう私を前にその子の瞳が、「先生はまだ小さなことでよくよしたりしているんだね」。そう言っているように思いました。

そして就職。「あいっは大手に決まったよ。さすがあいっだ」。私のもとにそんな言葉が届きました。

学年同窓会も終盤にさしかかる頃、三十歳になったその子が私に近づいてきました。相変わらずの凜とした様子。私の心臓の音は少しだけ早くなりました。

「先生、俺、先生にお礼が言いたくて」。

私の頭の中は疑問符でいっぱいになりました。その子は続けます。

「会社、いろいろ大変でさ、俺ももうダメだと思ってしまったこともあったよ。そんなとき上司に一編の詩を渡されたんだ。それ読んで俺、泣いた。そして、まだまだ大丈夫だ、がんばろうってそう思った。作者名を見たら先生の

名前だった。先生、ありがとう。俺、本当にがんばるよ」。

初めて心の通い合いを実感できた瞬間でした。その詩はもう何年も前にホームページで発信したものでした。きつとそれが、口伝え、ネット伝えに回り回ってその子の元に届いたのでしょう。早すぎず、遅すぎず、その子が一番必要としていたそのときに、それは届きました。

日本の電力。非常に大きく、また繊細なこの問題。様々な意見に耳を傾けると、私の脳裏には十五歳と三十歳のその子の姿が浮かびます。時代の波に翻弄され、それでもくじけずに歯を食いしばり日々を歩む姿。

あなたがそこにいて、その会社において、苦しみを背負いながら日々を送っていると思うと私の胸は痛みます。けれどまっすぐなあなただから、きつと未来を切り開くことができる。あなたにはその感性があるもの。

あなたは負けない

その強さを

私はずっとずっと前から分かっていました